

「人とのつながり」が価値化する社会

——雑誌記事における言説分析——

上智大学 伊賀倫子

1 目的

この報告の目的は、「人とのつながり」という言葉が、日常生活のレベルにおいて、どのような文脈のなかで用いられ、語られているのかを探ることである。ソーシャルメディアなどの登場によって、「つながり」という言葉を日常的によく耳にするようになった。また、2011年3月11日に起きた東日本大震災に関する報道のなかで、「人とのつながり」という言葉が多く用いられた。表現としての「人とのつながり」のニュアンスは、同じ言葉でありながらも様々である。日常生活で用いられる「人とのつながり」という言葉は、特定の関係性に限ることなく、様々な文脈に応じてその意味にゆらぎを生じさせながら用いられているためである。「人とのつながり」という言葉が持つ意味のゆらぎを捉える必要がある。

2 方法

そこで、雑誌記事を検討する。その理由としては、様々な文脈で語られる日常の生活言説の要素を最も含み持つメディア言説であると考えられるためである。また、雑誌ごとに記事の読者層を想定できるため、取材者／取材相手が意識して語る対象とその文脈も把握することができる。資料は、大宅壮一文庫のデータベースを利用する。そして、「社会という、捉えどころのない対象を捉えるためのスコープ」(赤川 2008: 47-8)を提示する言説分析を行うことで、社会背景とともにある「人とのつながり」の語りを明らかにする。

3 結果

「人とのつながり」をめぐる語りは、社会の変容を前提にしながら語られることによって、本来の定義以上の意味が付与されている。この言葉は、時代の変化を示すものとして語られ、社会問題を説明するものとして、そして、リスクへの対策として語られていった。雑誌記事における言説では、「人とのつながり」は、不安と安心の狭間に、あるいは不幸と幸福の狭間にあるのが近年の傾向として見られる。その語られ方としては、「人とのつながり」は、社会というレベルでは失われたものとして語られる一方、個人のレベルでは普遍的な価値を持ち、誰もが得られるもので、多くの人々が共感する温かな「人とのつながり」として語られている。このように「人とのつながり」は、一見すると矛盾するように思える二つの言説が合わさることで、その価値を見出されている。

4 結論

日常生活のなかで語られる「人とのつながり」という言葉は、成員たちが共有しているその社会のイメージを示すものとして用いられ、近年では、生き方の価値観と強く結びついている。このことは、現代社会において情緒的な「人とのつながり」が規範化されていることを示唆しており、「人とのつながり」を言説として捉えることで見えてくる現代社会の姿があるようにも思える。

文献

赤川学, [2006]2008, 『構築主義を再構築する』勁草書房。